生活行為の関心と実際の行動

——大学生について——

金城　正治

要　旨　大学生を対象に生活行為の関心と活動調べを行った．生活行為を日常生活行為・娯楽休息行為・自由活動行為・社会経済行為に分類し，そして関心・現在の活動行為・以前の活動行為の縦断的な視点から検討したところ，

1）日常生活行為は男性群にやらない傾向はあるが，比較的に男女共関心をもって以前からやられている．娯楽休息行為は社会人的遊びが増え高等学校までとは違った変化が見られる．自由活動行為は高等学校までは色々とやっており，娯楽休息行為よりも多いが，大学生活では逆に少なくなっている．

2）現在の生活行為は大学生としての学問を除けば日常生活行為と娯楽休息行為志向主体の生活である．その中でいくつかの自由活動行為をやっているが，人又は種目により偏りがあり，やってない対象者もいた．

つまり自由度の増えた生活行為が量や質的変化と共に日常生活行為と娯楽休息行為に流れやすく，対象者によっては自由活動行為への気づきや選択が十分でない事が分かった．

長大医短紀要 2：173－178，1988

Key words：大学生，生活，余暇，調査表

序　　論

現在の趣味や余暇等の調査は，ＮＨＫの生活時間調査や余暇開発センター[1]の調査に代表される．また障害者の援助のために作成されたＮＰＩ興味チェックリストのように関心を調べる調査もある．これはカルフォルニア大学ロスアンゼルス校のＮＰＩの作業療法部門で使用され，日本においては山田[2]によって紹介されている．このチェックリストを参考にして金子ら[3]は健常の青少年と中老年者を対象に調査している．さらにこれら二つの調査を折衷する形で現在やっている余暇活動とこれからやりたい活動を調査しているものとして，余暇開発センターによる参加希望余暇活動[1]や同じく余暇開発センターによる勤労者のレジャー学習ニーズ調査[4]等が調査の一部分として少しとりあげている．また石井ら[5]も障害者に対して作業療法の評価として同様なチェックリストを作成し試みている．

趣味や余暇の時代時代の断片を横断的な視点でみるには上記の調査でも十分である．し

長崎大学医療技術短期大学部作業療法学科

かし余暇や日常生活等の行為は生活行為全体の中で，また生活行為の流れの中で営まれている．よってその視点でみる必要もある．そこで生活行為を日常生活行為，娯楽休息行為自由活動行為，社会経済行為に分類し，“関心（将来への状況）”と“現在の状況”と“過去の状況”の過去現在将来と縦断的に見て，横断的な視点と縦断的な視点から検討する．そしてチェックリストとしてのあり方も検討する．

研究方法

ＮＰＩ興味チェックリスト[2]や余暇開発センターの調査項目[1]を参考にしてチェックリストを，表１に示すように余暇活動種目と日常生活行為を50種目抽出し作成した．従来総理府の「社会生活基本調査」等の様に娯楽休息行為と自由活動行為は一緒に取り扱われていることが多かった．これは労働に対して余暇という立場である．この二つを明確に分けることは出来ないが，娯楽休息行為がリラックスする事を主体とした行為で，自由活動行為は自己実現の一つの行為として促えると行為内容が大部異なってくる．そこで二つに分類する．そして１）関心がある・ない・わからない，２）現在やっている・手伝ってもらいながらやっている・やってない，３）以前はやっていた・やってなかった，の３項目のそれぞれに該当するところに○を付けるようにした．そして50種目以外に種目があれば記

Table 1.　種目内容の分類

日常生活行為		娯楽休息行為		自由活動行為		
食事をする	料理をする	ラジオをきく	お酒をのむ	詩俳句等をつくる	日曜大工をする	運動をする
風呂にはいる	裁縫をする	テレビをみる	カラオケでうたう	本をよむ	絵を描く	野菜をつくる
掃除をする	おしゃべりをする	音楽をきく	祭に参加する	何かを集める	編物をする	盆栽をする
買い物をする	新聞をよむ	占いをする	宴会をする	写真をとる	手芸をする	運動をする
おしゃれをする	洗濯をする	旅行にいく	映画をみる	楽器を演奏する	おりがみをする	体操をする
		温泉にいく	ゲームをする	書道をする	やきものをつくる	武道をする
		芝居をみる	賭け事をする	勉強研究をする	将棋をする	ジョギングをする
		散歩する		宗教をしんじる	囲碁をする	ゲートボールをする
	（10種目）		（15項目）	踊る		（25種目）

Table. 2　関心数・活動数・経験数の70％一致率の種目名

男性群（人数）			女性群（人数）		
関心がある	現在やっている	以前やっていた	関心がある	現在やっている	以前やっていた
テレビをみる(14)	食事をする(14)	食事をする(14)	食事をする(9)	食事をする(9)	食事をする(9)
食事をする(14)	風呂にはいる(14)	風呂にはいる(14)	買い物をする(9)	風呂にはいる(9)	風呂にはいる(9)
風呂にはいる(14)	テレビをみる(13)	テレビをみる(13)	本をよむ(9)	掃除をする(9)	買い物をする(8)
運動をする(13)	おしゃべりをする(13)	新聞をよむ(13)	旅行をする(9)	買い物をする(9)	テレビをみる(8)
本をよむ(13)	音楽をきく(13)	おしゃべりをする(12)	映画をみる(9)	おしゃべりをする(9)	ラジオをきく(8)
新聞をよむ(13)	酒をのむ(12)	買い物をする(12)	料理をつくる(8)	洗濯をする(8)	本をよむ(8)
音楽をきく(13)	買い物をする(12)	運動をする(12)	おしゃべりをする(8)	料理をつくる(8)	編物をする(8)
ラジオをきく(12)	本をよむ(12)	音楽をきく(12)	ラジオをきく(8)	テレビをみる(8)	おしゃべりをする(8)
映画をみる(12)	宴会をする(11)	ラジオをきく(11)	新聞をよむ(8)		新聞をよむ(7)
旅行をする(12)	新聞をよむ(10)	映画をみる(11)	編物をする(8)		洗濯をする(7)
おしゃべりをする(12)	掃除をする(10)	ゲームをする(10)	やきものをつくる(8)		掃除をする(7)
料理をつくる(12)			宴会をする(8)		
宴会をする(12)			テレビをみる(7)		
酒をのむ(10)			音楽をきく(7)		
買い物をする			おしゃれをする(7)		
ゲームをする(10)			手芸をする(7)		
賭け事をする(10)					

入する欄も設けた．尚2番目の現在やっている項目は，調査した日から1年以内の活動を示し，原則として意識的に又継続的に行っている活動とする．

調査は大学生23名（男子14名平均年齢20.6±1.4歳，女子9名平均年齢19.6±1.3歳）を対象とした．

結　　果

1）関心数（関心があると答えた数），活動数（現在やっている・手伝ってもらいながらやっていると答えた数），経験数（以前やっていたと答えた数）の平均種目数は，表3に示すように関心数は女性群が多いが，男性群とは5％水準で有意差はなかった．活動数と経験数は両群ともほぼ変わらなかった．また両群とも関心数と活動数では活動数が少なく5％水準で有意差があった．活動数と経験数では男性群は活動数が少なく5％水準で有意差があり，女性群はなかった．関心数と経験数は両群とも有意差はなかった．

2）関心数と活動数との経験数の関係をみると，女性群で関心数と活動数の相関係数は0.784，活動数と経験数の相関係数は0.958で高い相関を示していた．男性群で関心数と活動数の相関係数は0.384で低い相関があり，活動数と経験数の相関係数は－0.180でほとんど相関がみられなかった．

3）それぞれの項目の70％一致率（対象の70％以上が○と答えた種目）は表2に示す。内容において共通する種目も多く，日常生活行為と娯楽休息行為が大部分を占めていた．

4）関心があり現在やっている平均種目数は，男性群が15.3種目（60％），女性群が14.3種目（50％）であった．70％一致種目内容は，男性群が「食事をする」「風呂にはいる」「テレビをみる」「音楽をきく」「本をよむ」「新聞をよむ」「おしゃべりをする」，女性群が「食事をする」「買い物をする」「テレビをみる」「料理をする」であった．逆に関心がありながらやってない種目は，女性群が「映画をみる」「やきものをつくる」，男性群が「旅行をする」であった．関心が

Table 3.　関心数・活動数・経験数の平均種目数と標準偏差と内容

	男性群		女性群	
	わからない 2.4±3.4		わからない 1.8±2.6	
関心が	ある 25.6±6.0	ない 22.1±7.1	ある 29.0±8.3	ない 19.0±9.0
日常生活行為	6.8（69％）	2.6（26％）	7.6（76％）	2.0（20％）
娯楽休息行為	9.8（66％）	4.9（33％）	10.2（67％）	4.5（30％）
自由活動行為	8.9（35％）	14.9（79％）	11.4（46％）	12.5（50％）

括孤内の数字は各行為種目の中での平均選択数のしめる比率

現在は	やっている 17.4±4.9	やってない 32.5±4.9	やっている 17.0±6.7	やってない 33.0±6.7
日常生活行為	6.7（68％）	3.2（32％）	8.3（83％）	1.6（17％）
娯楽休息行為	7.5（50％）	7.6（50％）	5.2（34％）	9.7（65％）
自由活動行為	3.2（13％）	21.8（87％）	3.4（14％）	21.6（86％）

括孤内の数字は各行為種目の中での平均選択数のしめる比率

以前は	やっている 22.1±5.3	やっていなかった 27.9±5.3	やっている 20.5±8.2	やっていなかった 29.4±8.2
日常生活行為	6.3（63％）	3.7（37％）	7.2（72％）	2.7（28％）
娯楽休息行為	7.8（52％）	7.2（48％）	5.8（39％）	9.1（61％）
自由活動行為	8.1（32％）	16.9（68％）	7.4（30％）	17.6（70％）

括孤内の数字は各行為種目の中での平均選択数のしめる比率

なく現在もやっていないのは，男性群が21.6種目（95%），女性群が16.9種目（89%）であった．

5）以前から続いて現在もやっている平均種目数は，男性群が13.2種目（76%），女性群で13.3種目（78%）であった．70%一致種目内容は男性群が関心があり現在やっている種目と変わらないが，女性群で関心があり現在やっている種目に「風呂にはいる」「掃除をする」が加わった．以前はやってなく現在やっている種目は，男性群が「カラオケで歌う」「宴会をする」等があり，女性群に特異的な種目はなかった．以前はやっていたが現在やっていない種目は，男性群で「将棋をする」「運動をする」「書道をする」，女性群で「運動をする」「編物をする」等であった．

6）関心があり以前から続いて現在もやっている平均種目数は男性群が12.1種目，女性群が11.1種目であった．70%一致率種目は，男性群で「食事をする」「風呂にはいる」「テレビをみる」「本をよむ」「音楽をきく」「おしゃべりをする」，女性群で「食事をする「買い物にいく」「おしゃべりをする」であった．

7）関心がある中で日常生活行為や娯楽休息行為や自由活動行為の平均種目数と比率は，表3に示す．日常生活行為は関心がある，現在やっている，以前やっていたそれぞれで男女とも平均種目数はほぼ変わらなかった．娯楽休息行為は関心があるでは男女ともほぼ同数であるが，現在やっている，以前やっていたでは女性群が少ないが有意差はなかった．また男女とも現在やっていると以前やっていたの平均種目数はほぼ同数だが，関心あるよりはふたつ共少なく5%水準で有意差があった．自由活動行為は男性群で関心あると以前やっていたとはほぼ同数だが，現在やっているは関心があるより少なく5%水準で有意差があった．女性群は関心あると以前やっていたと現在やっているの順に少なくなり，現在やっているは男性群と同様に少なく5%水準で有意差があった．

8）調査項目50種目以外の活動種目は，男性群が「ドライブ」「バッティングセンターにいく」「平和運動」，女性群が「睡眠」「ドライブ」「パソコン」の各項目に一人づつあげていた．

考　　察

金子ら[3]の調査では，興味ありの男女差は有意差がなく，また内容において男性群がスポーツ志向，女性群が手芸等のクラフト志向の種目のしめる比率が高いと報告している．種目内容の構成をみると単純な比較はできないが，本調査でも関心があるの平均種目数に男女差はみられない．また関心がある70%一致率の内容種目においてもほとんど差はなく同様な結果となっている．それらの種目内容で家事行為を含め日常生活行為や娯楽休息行為はほぼ男女に共通するが，スポーツ志向，クラフト志向の種目は文化的な時代背景を考慮すると男女差とみる事ができる．

次に現在やっている種目内容をみると，女性群が日常生活行為特に家事行為，男性群が日常生活行為と娯楽休息行為主体の生活パターンである．家事行為は特に家族環境に影響を受けるが，自宅から通学している学生（男性7名，女性2名）は家事行為を周りに依存している傾向がある．その為男性群は家事行為がすくない結果を示している．余暇開発センター[1]の調査は10歳間隔分けているので，対象者の平均年齢により男性群は20代，女性群は10代と比較する．調査結果は男性群が「バー・スナック・飲み屋」「ドライブ」「外食」「ボウリング」「ビディオ鑑賞」「パチンコ」，女性群で「映画」「音楽鑑賞」「遊園地」「外食」「ゲーム」等が上位をしめる（50%一致率）．「ドライブ」「ボウリング」「パチンコ」

「遊園地」等は今回の調査では取りあげてないが，50種目以外の活動の欄をみると，男性群と女性群に「ドライブとする」は2人いるがあとはない．調査時で想起できなかった事もあるが，まだ車，オートバイ等の所有率が低く，ボウリングは他の地域より十分に普及していないこと[1)]等も要因の一つである．尚本調査と共通する部分は上位を示す種目がほとんど娯楽休息行為である．つまり娯楽休息行為は，種目としてやられる一致率が高い事が分かる．また現在レジャー産業の多くがこの行為を中心として成立っている事[1)]の報告もある．

またやっている種目数をみると，女性群一人一人は関心が高ければやっている種目数も多く，以前からやっていた種目数も多い．それに対して男性群一人一人は関心があるとやっているは少し関係があるが，以前のやっていた種目数はあまり関係がない．つまり，女性は高等学校までの生活洋式と大学生としての生活ではあまりかわらないが，男性は大学からの生活で変化が見られてくる．

これらの関係をもう少し内容を検討すると，関心がある種目の5～6割程度を実際にやっており，その中で日常生活行為は関心があるとした種目はほとんど以前からやっている．娯楽行為は現在やっている種目は若干の男女差があるが，関心があるの種目はほとんど変わらない．余暇開発センターの調査[1)]でも娯楽行為に性差はあまり見られなくなっている．自由活動行為は「本をよむ」が上位に位置するだけで，一人一人環境と志向性に応じてやっている．しかし関心があるとしめす中で現在やっている種目は3割程度で人により偏りがあり，そして何もやってない者も数名いる．また関心がなければほとんど実際にやっていない．これらは，Matsutsuyu[2)]が興味の側面の一つとして「興味は効果的な行動をはっきりと示すものである」としている中で，否定的な要素に対しては言えるが，肯定的な要素では必ずしも言えるとは限らない事を示している．

また一方現在やっている中で以前からやっている種目で，男女共に日常生活行為は引続き行われている．娯楽休息行為は男性群に宴会等などの社会的遊びがみられるが，女性群に特徴的な種目はみられない．余暇開発センターの調査[1)]では20代の男女とも「バー・スナック・飲み屋」が増えており，本調査でも女性群は多くが関心を示しているので増えていく可能性がある．つまり日常生活行為や娯楽休息行為は文化的に強い影響を受けやすく，そして行為に熟達化があり流れの中で行なっているといえる．つぎに自由活動行為をみると，この行為の減少は高等学校までは教育的配慮や家庭的な要素の下で行われている事が多く，そして自己決定する自由度が大きくなった大学生活により，生活スタイルや志向性の変化等の為である．しかし志向性に多様化は少なく，量の違いはあるが質的に均一化の傾向がある．これは自由活動行為が現在の生活で必要条件の行為でなく，また今まで自由活動行為を含め生活行為が，択一的な選択で行われ気づきが十分になされてないのも要因である．よって関心があっても余暇は，娯楽休息行為に流れやすくなる．

結　　論

行為を全体の中や流れでみると一人一人の生活の多様な志向性が分かる．その中で志向性の選択は自由であり，偏りがあってもよいが，本人自身が気づいているか気づいていないかの次元での認識は重要である．本調査でも対象者によっては，気づきが十分になされてない事が把握できた．そしてこれらは漠然的な生活をおくる可能性を残している．

また生活行為は決して単独で成立つものでなく連続性があるので，生活行為全体の中で促えなければ偏り歪みを生み出すことが多い．つまり生活行為は日常生活行為・社会経済行

為・娯楽休息行為・自由活動行為が縦断的・横断的に適度なバランスで成立っている．それらを踏まえた上で本チェックリストは，縦断的・横断的に各行為を生活行為全体の中で促える事ができ，そしてスクリーニング的に生活全体を促える事が可能であった．

文　　献

1．余暇開発センター：レジャー白書'88，余暇開発センター，東京，1988.

2．山田　孝：ＮＰＩ興味チェックリスト，理・作・療法，16(6)：391－397，1982.

3．金子　翼，他：健常者のactivityに関する興味について，第15回日本作業療法士協会学術誌：1～3，1981.

4．経済企画庁国民生活局：生涯レジャー学習，大蔵省印刷局，東京，1987.

5．石井理恵，他：趣味興味に関する質問紙の使用経験，作業療法，6：47，1987.